

哲学と教育について：ヴィーコの「創発力」をめぐって

古賀，徹
九州大学大学院芸術工学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1564203>

出版情報：哲学論文集. 50, pp.57-73, 2014-12-26. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

哲学と教育について

—— ヴィーコノ「創発力」をめぐって ——

古賀 徹

哲学とは、ソクラテスが身を以て示したように、何かを教える立場にある者自身が、対話を通じて、自ら「知者」の立場を相対化し、「何も知らない者」として、自分の枠組みから離脱していく魂の解放の経験である。そして教えられる者は、教師自身のそうしたありかたに触れることを通じてそれに共振し、善美をもとめて現状の自分を変容させゆくスリルを味わう。「魂への配慮」としてこのように哲学を定義するならば、そこにすでに教育が不可欠の要素として含まれていることが分かる。そこで哲学は教育と一体であり、教育はまさに哲学として実現される。

だが逆に、自らをまずもって知者として位置づけ、その所有する知を真理だとして学生に一方的に注入するありかたは、ソクラテスが批判したかぎりのソフィストの営為に該当することになるだろう。プラトンもまた、洞窟の中に緊縛されたまま大量の影絵を注入される人々のありさまを指して「非教育」と批判している。そうした「非教育」ないしは非哲学は、教えらるる者の魂を空洞化して植民地化すると同時に、教える者の魂をも凝固させ、貧困化するだろう。

教える者（教師）と教えを受ける者（学生）が、対話を通じて、それぞれの視野の縛りを外しながら互いを解放し、ともににより広い視野へと導かれていく魂の過程を実現するべきだとするならば、そうした哲学の条件を今日の哲学教育のなかに

どのように展望すればよいだろうか。私の場合、研究者養成を志向する大学院生教育を中心にしながら現状の自分に対する自己批判も含めてこれを論じてみたい。

一、哲学教育の植民地化

近年、哲学教育の重要性が説かれながらも、現実には哲学や倫理学の授業が削減され、教員ポストの減少が続く根底的な理由に、現状の哲学研究と教育が非哲学と非教育に陥っているのではないかという疑念がある。哲学者であるはずの者が非哲学的に研究し非教育的に教える、その現状を学の植民地化とテキスト客観主義という二つの概念によってまずは考察しよう。

学における植民地化¹とは、現状において自己の魂は無価値かつ無内容であり、それを克服するために、自己の魂の外部にそれ自体として存在する真理や価値に無限に自己を同化し憑依させるようなありかたを指す。その結果魂は、自己のうちに価値を実感することができず、いつもそれをどこか外部にあるものと感じ、その剥奪感のゆえにさらに強力に外部に従属することになる。学習が、学習者の自立を実現するのではなく、かえって外部へのさらなる従属を生みだし、権威主義的主体、権威主義的人間組織を発生させる。理性の自由とは、歩行器を外して自ら思考する勇氣を持つことであると言ったのはカントであった。だが哲学研究がその研究と教育のあり方において現状なおもますます深く歩行器にしがみついでいくとすれば、それは教育研究そのもののうちに自己植民地化を進行させるある種の必然性が埋め込まれているせいであると考えられる。

日本における西洋哲学研究にとってむろんこの外部は西洋でありそのテキストに該当する。日本の哲学研究は、ある欧米の思想家についての研究者となるためそのテキストにかじりつき、留学して現地の欧米語を修得し、現地でコネクションを

築いてその一員となり、ご当地の「最前線」の議論や研究動向を仕込み、その「本国」への接近具合を背景にして日本国内で自己を権威化し、それによって自らの言説販売ルートを確立するという、いわば輸入代理店方式からいまだ十分に抜け切れていない。

たしかに日本が近代化した当初は、西洋哲学研究においてそうした姿勢をとることは理由があった。そうした先人たちの努力のおかげで、非西洋圏ではもつともはやく、この国では西洋思想の翻訳が整備された。非西洋文化における哲学研究のほとんどが欧米圏に留学し、欧米語によって哲学を語る以外に選択肢がない状況において、中国やインド思想に引きつづき、明治以降に西洋思想までをも急速かつ高精度に日本語化した先人たちの能力と功績は、思考の植民地主義に対抗するという点で讃えられるべきであろう。問題はその図式をいまだに日本語による哲学が相対化し切れていないことにある。こうした現状が未だに続いている背景には、日本の近代化の歴史、さらに遡れば仏教や儒教を輸入するかたちで思想形成を遂げた日本の思想史そのものが孕む問題が存在すると思われる。

真理の中枢が自己の魂と身体の外にあるとする真理の植民地主義は、研究者教育においてまさしく反復される。哲学のテクストにはおのれを虚しくして肉薄せよと大学で教わる。そしてそのためには、その哲学者の言葉それ自体に身を浸せと教わる。いまや外国語を習得し、その原語テクストに当たり、その声を自己自身のうちに鳴り響かせなければならぬ。それはいわば「憑依」の訓練である。こうした原語憑依主義は、より高級な言語としての欧米語への無限の同化衝動と、それに同化しえないコンプレックスを生み出し、そのコンプレックスは、特定の欧米の思想家の原語に憑依しているかぎり、そのかぎりで真の哲学者でいられるという度し難い植民地主義を生み出す。そしてそこにおける「思考」とは、さしあたり内実不明の原語の真の意味、その哲学者の真意を無限に探りつづけるというかたちに制限される。

こうした自己植民地化のうちにある研究者は、真理対象に接近しつつもそれに完全に同化し得ないコンプレックスのゆえにつねに不安に駆られている。そしてその不安のゆえにさらに無限に自己を駆り立て、知識と業績を膨れあがらせていく。

根底的に自信がないがゆえに、つねに自分のその自信のなさが見破られないように、論文を無数の注によって固めていく。しかしながらそこで示される知識や業績は、すべてのものを押さえるべしという強迫衝動の残骸であり、たんなる不安の痕跡にすぎないがゆえに、そこに提示される文章は、研究者自身にも、また読者にも、また学生にも、その蒙を啓き、その魂を解放するという実感を与えることがない。知識の誇示とこの意味での無意味さ、その並存がこうした研究の特徴となる。

このように植民地化された知識は、その「本国」ないしは権威者¹¹著者への接近度合いに応じてその「真理」を構成するから、研究者はその権威者のうちに理想とすべき自己のあり方を投影し、無限にそれに近づくというナルシズム的構図のうちに陥る。このようにして「○○研究者」という研究者の自己規定が成立する。「○○研究者」にとって○○が批判されることは、自己そのものが否定されることにはかならないから、自己の実存を賭けてそれに対抗する必要がある。このようにして研究者はその研究対象の哲学者によって分類され、その分類の内部で接近競争を続けることになる。このように、○○研究者として自らをアイデンティファイし、国内の同業の○○研究者と競争し、そのイタコ順位を相互に競いあうという今日に至ってもなお抜きがたい哲学研究のスタイルは、自ら自身で思考しない理性の未青年状態、にもかかわらず憑依の接近程度によってどっちが「上」かを瞬時に判別し、自らを「先生」と呼ばせる悪しきソフィストぶりを示すに余りあるように思われる。ちなみに以上はすべて私の自己「告白」である。

そういう「純粹哲学」の腐敗に対して、近年では現実に直接関わる応用哲学というものがある、という反論もあろう。ここでは現実に関わるアクチュアルな思考が息づいている、と。しかしながら生命倫理や環境倫理、情報倫理やビジネス倫理という分野においては、それを研究する外国の応用倫理学研究者の思想を、これまた今まで通りの憑依方式で「研究」するにすぎないものや、その枠組みを輸入してその枠にしたがって日本の現実を切り取ってみせるものも少なくない（私の研究にも少なくない）。哲学の神髄は、思考の前提を疑い、思考の枠を外すことにより、問題が新たな姿を見せていくその有様を記述することである。にもかかわらず、応用哲学の一部には、世間で広く認められる前提（たとえば「人権」とか「公共性」

とか「安らかな死」とか「持続可能性」とか「安心・安全」とか「生物多様性」とか「その人らしさ」とか……や、もしくは他分野における専門家が依拠する思考法に則って「つまりそれを疑うことなく、個別の問題の「是非を判断」し、「あるべきあり方」を提案しているものもある。要するにそこでも、他の応用倫理学者へのイタコ化や、世間的価値観や他分野の枠組みに対する哲学的思考の植民地化が生じている。これもまた、洞窟の中に緊縛されたまま何かを注入される非教育の姿であろう。ちなみに応用哲学において近年よく見られるパワーポイントによる発表を見るにつけ、プラトンの洞窟の比喩がそのまま現実化したのではないかといい錯覚を覚えることがある。照明を落とした部屋、後方から差し込むプロジェクターの光線、スクリーンに対する座席の固定、本来はそこから連れ出す人が哲学者のはずなのだが。

他者の言葉への無限の憑依、哲学の非哲学への転落、洞窟的非教育においてもっともはっきりとあらわれる症状は、哲学の業務化とでもいふべき事態である。自己の日々の生活のありかたを縛る枠組みから自己を解放するという初心を見失い、善美をめぐる自己教育の修練を棚上げして、哲学研究が知的好奇心に基づく学問的達成、ひいてはキャリア追求のための手段となってしまう。そしてこの業務化は、自己の実存とは無縁なかたちで「研究の前線」なるものが（たいていは欧米のどこかに）存在し、自己の解放的関心から離れてその「前線」に挺身することが哲学だという研究の構えを生みだす。そしてその結果、知識は集積して業績（ソクラテスの言葉では「評判」）は上がるとしても、研究は別の対価のために堪え忍ぶ苦行となり、その結果、研究をすればするほど自己の内実が貧しくなり、人間関係が空疎化して生命の実感を見失っていく。そしてそれを補うべく、アルコールをはじめとした各種の嗜癖に陥いるのである。（くどいようだがこれは私の自己批判である。）

理性の病理ともいふべき哲学研究の植民地化が生じるのは、追究すべき真理が、他者のテクストというかたちで自己の外部にそれ自体として存在するという思い込みのせいである。ソクラテス（産婆術）にせよプラトン（想起説）にせよ、真理は自己の内部に潜在的に含まれるものでもあり、他者との対話において自己を問い尋ね、自己の新たな姿を発見することが

哲学であった。だとすれば現代の哲学の主要な手段であるテクストの読解においても、その読解の作業のうちに自己への問い尋ねが、自己を既存の枠から解放しようとする実践的実存が必然的に含まれているはずなのである。にもかかわらず、それ自体として存在するテクストの意味なるものを精確に日本語に要約・コピー・パラフレーズすることが哲学だと主張される。研究対象の哲学者の言葉で、その哲学者のように思考し、そうすることでその哲学者の背景と「真意」を探る。ここでテクストは著者なるものへの無限の同化の媒体、その手段と化している。客観主義的な文献実証主義においては、「〇〇によれば」から始まる引用は、実証主義の反対物、つまり自分の代わりに權威に考えてもらおう符丁、デカルトが批判した伝聞權威主義の枕詞と化するのである。

一、トピカとクリティカ

テクストを読むことの可能性を考えるために、ここはひとつ植民地主義的に、イタリアの哲学者、ヴィーコの議論を「引用」してみたい。『われらの時代の学問方法について』（一七〇八年）に「よれば」、「学問の方法」には、「クリティカ (critica)」と「トピカ (topica)」があるという²⁾。クリティカとは、方法に基づいて対象の適否を判断する技術、つまり「真理について述べる弁論の技法」である。これに対してトピカは問題のありか (topos) を発見し、そのトポスの固有のありさまを見極め、それにもとづいて「言葉豊かに述べる弁論の技法」³⁾だとされる。そしてそれは、「共通感覚 (常識)」¹⁾に基づいて異なったものを媒介する技術だと規定される。ヴィーコは、「われわれの時代」においてはデカルト流の批判的「方法」が優位し、古代ギリシャ以来のもうひとつの重要な知のあり方であったトピカが等閑にされていると主張する。その結果、教師から伝授された真理を判別する方法を学生たちは信奉するばかりとなり、「教師によって教えられないなら何もものも真理とは思わぬ人のように悪い意味で敬虔」⁵⁾になりかねないというのである。

結局のところ、クリティカの優越によってヴィーコが指摘するのは、方法が自立して運用される結果、その方法それ自体が適用される場所を見失い、方法に従って判断することの意味が失われるという事態であると思われる。だがそもそもデカルトが四つの規則というかたちで「方法」を考案したのは、権威ある書物からの引用にもとづいて真理を判定する権威主義的なテキスト利用から抜け出すためであった。引用は結局は伝聞や伝承であるから知識の獲得の手法としては認められない。引用の権威主義に対抗して、事柄と直接的に向き合ってそれを直視し、記述する新しいテキストのありかたをデカルトは提案した。つまりデカルトは、物事を見て各人が判断する良識を根拠にしてみずからをとりまく状況のなかに問題を発見し、良識が通用しなくなった状況に対してふたたび良識を復権させたのである。その結果として「方法」≡制度が案出されたのであり、そのかぎりで方法は状況に対する意義を持ち得たといえる。だがヴィーコが批判する、デカルトのエピソード⁶たちはその方法を自立化させ、デカルトが書いたその規則≡テキストそれ自体が真理とする「敬虔」な教条化に陥っている。

ヴィーコによれば、こうした方法の教条化を防ぐには、「トピカは教授において、クリティカに先立たねばならない」と述べる。つまり状況において問題のありかを発見し、その問題をかたどる力が学生のうちにまずもって養われなければならない⁶というのである。そうしたトピカの能力は、ヴィーコにおいてどのように具体化されているか。

トピカは、同じくヴィーコの著作である『イタリア人の太古の知恵』においては、複数の事象を媒介するメディアウムを学習者の「共通感覚」のうちから引き出し、顕在化させる技法だとされる。そしてそれは、相互に離れた二つの観念を結合する能力、つまり三段論法における「中名辞 (medius terminus)⁷」を発見する術として規定される。このヴィーコの論述がアリストテレスの論理学に基づいていることは明らかである。アリストテレスの三段論法の図式によれば、はたしてソクラテスは死ぬのが問題となるとき、その問題状況に対して、「人間」という媒介概念を見いだすことができれば、「ソクラテスは人間である」（小命題）と「人間は死ぬ」（大命題）という二つの命題が構成され、そこから「ソクラテスは死ぬ」という

結論が論証される。このとき、「ソクラテス」(小名辞)と「死ぬ」(大名辞)を媒介する概念、「人間」は「中名辞 (meson)」と呼ばれる。

「探求されるものがすべて中名辞の探求であることは明らかである」とアリストテレスはいう。ではこの中名辞はいかなるしかたで見出されるのか。ヴィーコは「実のところ、三段論法を用いる人は、異なることどもを結び付けるのではなく、類のもとで定立される種をその類自体の内部から引き出している」という。たしかにアリストテレスの三段論法において、たとえば「ソクラテスは死ぬ」という結論命題においては、「ソクラテス」と「死ぬ」の二つの観念をたしかに結びつけたはずの鍵概念、つまり中名辞は、表面上消え去って見えなくなっている。しかしその概念は、そうであるがゆえに、両者を結びつけたはずのものとして、その結論命題のうちに潜在的に含まれている。だからこそ学習者は、その媒概念を、二つの名辞の関連のうちに顕在化しうる権利を保持するのだといえよう。

考えてみるにその顕在化は、ソクラテスが死ぬのはなぜかというその根拠を明らかにするかたちでなされるであろう。そしてその根拠(人間だから)は、まさに「死ぬ」と「ソクラテス」という二つの名辞を顕在的に意識している学習者自身が、その二つの概念を結びつける根拠を自分自身のうちに探ることによって発見される。つまり、名辞同士の媒介、その蝶番が、その結合を成就させる学習者のうちに求められるわけである。この意味で学習者は、問いとなる命題によってその媒介項の案出を課された存在だと言える。アリストテレスは、「思考のはたらきによる、すべての教授、すべての学習は、どれもみな、(学習者のうちに) 予め存する認識から生れてくる」(10) (内は訳者による注) という。だとすれば結論を論証しようとする学習者は、その中名辞を自分のうちから、つまり「ソクラテスは死ぬ」という論証されるべき命題を課されているかぎりの自己のうちから引き出し、それを顕在化させることになろう。

それが可能となるには、二つの名辞が位置する状況、つまり様々な名辞たちの布置連関を見通し、それらを媒介しうる名辞をみずからのうちから引き出す状態(ヘクシス)が探求者において準備されている必要があるであろう。探求者の身についたこ

うしたエートスこそ、ヴィーコという共通感覚に相当すると解釈しうるだろう。共通感覚とは、すべての名辞の連関、すなわち世界総体について、それを潜在的にであれ見通しているというある種の確信であり、同時にすべての人々が共有している状況のうちで自らの位置を定めているという信念であり、そうであるがゆえに、人々を説得しうる媒介項をそのつど自己のうちから案出しようという自信のごときのものであろう。普遍的・客観的に妥当する推論はひとりの人間の独立した判断としてみ成就するという論理の逆説が可能となるのは、自己の内面が外界と照応している共通感覚のなせる技である。この感覚は、アリストテレスにおいてはポリスの共同性のうちに、そしてヴィーコにおいては人間であれば誰しも保持する能力の普遍性のうちにその根拠をもっている。トピカとは、学習者自身が状況のうちで問題とその解決を自己のうちから取り出す技法とその能力を意味するのであり、それはいわずにせよ、論理の機械的推論を超える自己反省の次元を要求するのである。このように見てくれば、アリストテレスの論理学は、公理と推論規則という方法にもとづく機械的な判断（クリティカ）の背後に、自己のうちから媒概念を顕在化させるいわば産婆術的論証（トピカ）を同時に備えていることになろう。後者の論理学は、二つの名辞の論理接続を可能にする原因がそれらの名辞もしくは探求者に内在するとみなす点で有機的である。この有機的な論理学は、むしろギリシャ全体を支配する有機的自然観、ピュシスの原理の一部である。

アリストテレスの論理学は、外見上機械的に進行するかにみえる推論過程の背後にそれを駆動させるいわば根源的な生命力の次元、つまり普遍的真理が自己ひとりの内奥を根拠としてのみ展開される独特の媒介性の次元を隠し持っている。こうした有機的な論理学は、自己を問うこととして世界を問うというソクラテスの初発の動機を継承するものであり、いまこの私の所作（媒概念の発見による接続の操作）が宇宙全体と独特の照応関係にあるという全体論的世界観を古代から中世へと伝えた。しかしスコラ学派の論理学においては機械的な推論操作がすでに優位し、現代の記号論理学においては論理の有機性の次元は論理学から切り捨てられてしまった。論理学のそうした過渡期において、デカルトの「方法」の自立化を、論理学の機械的自立化の端緒としてヴィーコは批判しているのだと思われる。

ヴィーコは、この媒概念を発見する能力をとくに「創発力 (ingenium)¹¹⁾」と呼んでいる。論理的推論を駆動するのは、この創発力、いわば生命の有機的な力なのである。しかし同時にその創発力は、既存の方法の限界を見抜き、その妥当性を遮断し、そうすることで感覚を規制する枠を外して、それをより普遍的な回路へと開く良識の突破力の次元でもある。方法がその生命力を失うのは、創発力の次元が発動せず、推論の連鎖がいわば形骸化した習慣のごときものとなり、機械的な自動運動と化すときである。そうした方法の機械化に直面して創発力は、推論を構成する各要素を既存の連関から切り離し、それらをふたたびまったく新しい連関のうちに置く媒介として働く。そうした方法の中断をなす契機をヴィーコは「良識」の名で呼んでいるのである。

ヴィーコのいうトピカとは弁論の技法である。それは人々を取り巻く環境、つまり事象の総体を媒介しゆく中名辞の連鎖を形成し、それをもってその事象に血を通わせゆく決定的な弁論を為す技術であった。その言葉の数々は、学習者のうちに潜在していた概念が次々と顕在化するかたちで、いわばひとりであふれ出てくる。弁論はもはや事柄を特定の方法にしたがつて外側から弁別するものではなく、状況とその問題のうちに生きる人々に、その人々が位置づく問題状況をかたちとして可視化する媒介の言語なのである。そうした言葉の形象を話し手がその内側から発動するならば、それは同時に、聞き手に対して、聞き手自身があたかもその内奥から発話するかのように聴かれるだろう。そのときはじめて言葉は既存の思考習慣を破壊する威力をもって語られ、そして聴かれる。これこそが修辞が同時に論証となるトピカの次元なのである。

三、テクストを読む本来の意味

ではこの創発力の訓練は具体的にいかになされるのか。悪い意味での敬虔でもなく、かつ軽率な自己の主張でもなく、ただしくトピカの能力を発達させる教育のあり方として、意外なことに「聴くこと」をヴィーコは挙げる。「一般に哲学の新参

者の主たる任務は聴くことであつた。そこから彼らは固有の述語によつて聴講生と呼ばれたのであつた¹²⁾。この「聴くこと」とは、教師の言葉をたんに暗唱しそれに機械的に追従することではない。それはむしろ、教師が発する言葉の連鎖に触れることで、「それはこういうことですよ」と、それらをつなげゆく媒概念を学習者がみずから案出し、教師の言葉に血を通わせてそれらを自分のものとする自発性の訓練であると言へる。「聴くこと」とは、言葉を受け取る知性的受動性が同時に創出的能動性を發揮するもつとも原初的な局面なのである。

だとすれば原典読解演習においてテクストを忠実に読む訓練もまた、創発力育成の原初的な局面であるはずである。疎遠な言語に付き従い、それを自分に納得できるように読むこと自体が、創発的能動性を発動させることに異論はない。だとすれば、こうした創発力の育成が、悪い意味での「敬虔な態度」へと制限され、イタコの研究へと転化していく悪しき条件は何か、これが問われるべきであろう。それは、文獻のいわゆる正確な解釈が、他者の言語と自己の「あいだ」において成立することが忘却されて、自己の実存とは無縁なしかたですでにテクストのうちにその意味が先行して存在すると考えることによる。テクスト解釈の客観主義的誤謬である。その誤謬においては、創発力の発動はすべて、テクストそのものの客観主義的解明、その著者への憑依という構図のうちに回収され、哲学研究とはその客観主義的な意味を日本語でパラフレーズすること、つまりイタコとして振る舞うことだといふことになつてしまふ。

「聴くこと」をつうじて養成される創発力が、悪い意味での「敬虔な態度」を乗り越えるためには、テクストの理解が読み手との「あいだ」で成立することをまずもつて自覚する必要がある。その「あいだ」とは、読み手がその思い込みを超えて疎遠な言語に直面する一方で、その言葉の連鎖を自らの創発力を通じて媒介し、自分の言語へと組み替へる次元を示している。そしてそうした媒介は、そうしたテクストの読解＝媒介を通じて、読み手自身とその読み手が位置づく場所（トポス）を構成する諸要素までもが同時に新たな媒介へとまたらされるかたちで実現する。なぜならば読み手の創発力とはそもそも、自分自身を構成する世界の諸要素を相互に接続する中名辞を発見する力として定義されていたからである。テクストを

読むことが同時に自己と世界の理解を実現するとき、そのときにのみ、そのテキストの読解において発動される創発力は、従来の世界理解を可能にしていた「神話」を切断し、世界と自己に新たな姿をもたらすであろう。

ここでは創発力の二つの働き方が問われるべきであろう。それは一つには、植民地化する媒介をもたらすものである。他者の疎遠な言語を理解する創発力がその場所（トポス）を忘却し、自己や世界の意味の刷新から切り離されて、テキストそれ自体の客体的意味への接近という構図の中で発動されるときには、創発力は自己の外部に存する他者の意図、つまりそれ自体として存在する真理目標に接近する手段となる。こうした構図の中では創発力は、それが世界と自己の理解というそもそもの創発の条件を蔑ろにするがゆえに先細りして弱化するであろう。そしてもう一つは解放する媒介、いうなれば自己と他者とのうちに共振、つまり交感を引き起こすことをそれ自体目的とする伝達である。解放的媒介においてひとは、自らがそのうちに位置付き、自らを拘束する問題状況を可視化し、同時にそれを解決する鍵概念を発見することで、他者と生き生きと連動する。この媒介は、探求対象の側に存在する問題の解決が同時に探求者のうちに潜む何かの顕在化、つまり探求者自身の教育として実現し、しかもそれが他者との交歓へと開かれていく有機的解放を実現する。

プラトンが言うように哲学が自らの洞窟的呪縛を解く対話の操作であるとすれば、テキストとの対話とは、自分が思うようにテキストを解釈することであるはずがない。そうした恣意的なテキスト読解は、自己を拘束する束縛をたんにテキストに投影してそれを真理として再確認するだけであり、みずからの呪縛をむしろ強化するであろう。テキストは自己を異化する力を発揮する必要がある。そのためにはできるだけ予断を排してテキストに沈潜することだ、と教えられる。伝統的な言い方では、テキストの素読にこそ意味がある、と。テキストを読むことに意味が生まれるのは、ヴィーコがいうように、その疎遠な言語を「聴くこと」を通じて、それを自分の文脈で整合的に解釈する「創発力」の発動を読み手が強要されるからである。そしてその原初的な創発力の萌芽は、読み手が位置づく布置連関を一つのトポスとして問題化することに繋がりは行くはずなのである。だがこの萌芽が正しく発育せず、自己とは無縁ないわゆる〈学問の最先端〉なるものへと客観主義的

に歪められていくことがある。テキスト読解をたんに業績達成（とそれによる評判）の手段とするときの弊害とは、テキストの意味が自己の実存から切断され、テキスト読解の活動が自己から疎外されて、結局はその意味を失わせていくことである。みずからを虚しく白紙にしてテキストに「肉薄」する、という言い方がこのような方向性を示唆するのであれば、テキストは逆にその虚しい白紙の投影物となり、そこで客観主義的に把握された「成果」は読み手に何らの意味も聴かせないと思われる。

だとすれば客観主義的読解に対して、読み手の状況を分析するかたちで機能するテキスト読解を対置する必要がある。分析的読解は、テキスト、すなわちすでに与えられている思考の方法（クリティカ）を、それを可能にした場、つまりトボスへと差し戻す。ただしそのトボスとは、あくまで現在の状況、つまりテキストの読者がそのうちに位置づく場所として、読者それ自身が構想するものである。クリティカ（テキスト）に基づくトピカの構想は、テキストを書いた哲学者の過去の歴史的・伝記的研究に留まらない。客観主義的歴史研究にトピカの構想力が切り縮められてしまうならば、それを追跡する学習者はふたたび学習過程から疎外され植民地化されるだけである。トピカはテキストの書き手ではなく、読み手の周囲にそのつど構築される必要がある。テキストは、読み手の諸問題の配置を貫きそれを一つの形象へと転じるメディアとして読まなければならない。これは同時に、読み手が位置づく状況を読む、読み手自身の操作となる。その読み取られた状況のなかで、その問題配置をつなぐメディアとしてテキスト⇔クリティカは位置づけ直されるだろう。このトピカの構想一つの創発とみなすならば、その創発力とともにテキスト論理はその意義、つまりいまこの問題布置を読み解くメディアウムとして位置づけられ、はじめて修辭的⇨論証的となるであろう。そのときテキストはすでに確立された真理の論理ではなく、自らを虚しくして無限に「肉薄」する礼拝対象でもない。自らが位置づく状況のうちに諸問題を発見し、その本質を見通し、それをもって他者に対し、その内側から伝達する弁論としてテキストは鳴り響くと思われる。

テキストが「言葉豊かに述べる弁論」となるのは、身体が位置づく状況に内在する諸問題をつなぎ合わせるメディアの位

置にテキストを置くときである。その操作を通じて意識はこれまでの知のあり方を中断され、これまで自分の視覚を可能にしていた枠組みから解き放たれて、状況、すなわち身体への新たな視角を与えることができる。テキストを読むことで状況を讀む、そうした喋番の操作を訓練する場として、さしあたり原典読解演習を位置づけることができよう。

その作業はさしあたり、テキストに書かれていることを、それとは異なった自分の言葉で、しかも自らの問題関心に応える具体例のなかで表現し直す訓練から始まるように思われる。だとすれば読解において原語テキストはひとたび日本語に翻訳されたのち、その翻訳語をもういちど状況の言語、つまりトピカの言葉へと「創発力」をもって媒介する必要がある。翻訳はそれ自体翻訳されなければならない。この操作こそ、身体化の名で呼ばれるべきであろう。テキストを身体化するとは、すでに確立された制度としてのテキストに無限に同化することでもなければ、その制度を拒絶していわゆる「自分の」、疎外されない思考に立てこもることでもない。それは疎遠なテキストを「聴くこと」によって、その硬質な抵抗力によって自己の創発力が喚起され、「これはこういうことだよね」と、その創発的な自分の言語によって、自己の状況を明らかにするようテキストを読みなおすことである。それは逆説的には、理解を阻むテキストの硬質な力を梃子としてテキストを捉え直すことであり、またそうした距離をとる過程のうちではじめて正しくテキストに接近しようということである。そしてそのようなきわめて個人的な作業の過程とその痕跡が、正しく学問的業績の名によって呼ばれるべきである。自然科学の業績競争をモデルにして哲学の業績を理解するべきではなく、むしろそれは個人的な解放的経験の軌跡であり、その残骸であり、そのつど一回限りのものなのである。

四、魂への配慮とは

他者のテキストとしての方法に無反省に従属すること、つまり他者の声を自らに憑依させることが魂にとって有害である

のは、それが魂の自己忘却を結果するからである。善美を求める魂は、それ自身を豊かで美しいものとする道求めて探求を開始する。その過程において他者の言葉と出会い、それに導かれようとする。そこで他者の言葉はあくまでも、みずから魂の動機に関連するかぎりで意味を持つ。そこでの関心はあくまで自己の魂にあり、その観点から他者の言葉の意味を考えるのである。そこで魂は、諸事象からなる状況のうちに問題を発見し、その観点から他者の言語に聴従しつつ、それらを媒介する創発力を發揮する。これこそが自らの問題に応えうるかぎりで他者の言語を理解し、そうすることによって自分の道を見いだそうとするトピカの局面である。これに対してひとたび獲得された方法を基準として諸事象の是非を判断するようになると、方法の自立化の局面、つまりクリティカ優位の状況を迎えることになる。トピカとクリティカは手を携えて、バランスよく發展すべき能力である。だがここでその方法がトポス総体のうちで仮設的・方法的にのみ有効であることを忘却し、その方法を真理それ自体と誤認するようになると、クリティカは魂に対してその方法への無限で無限定な従属を要求するようになる。魂はそのとき、自らの初発の動機を忘却し、わけもわからずその方法へと自己を憑依させる。他者の思考に自分を同一化させることは原理的に不可能である。それが不可能であるがゆえに、その距離を肯定的な契機として、魂は他者の言葉を自らの問題状況の中で自分なりに理解し解釈できるはずである。しかし魂が研究対象との同一化を志向するとき、同一化の原理的不可能性はたんに否定的なものとなる。したがって憑依の根底的な感情は理解から隔てられた不安である。そうであるがゆえに魂は、研究対象の思考をたんに追跡し再現しようとするほどその不安に囚われ、ますますその衝動を強迫的なものにしていく。自らの善美の要求を忘却し、自分の足元を閑却して、それ自体真理とされるものに自らの魂を空虚にしたままただひたすら肉薄すると称するのである。

こうしたいわば精確さの病理と称すべきものから魂を取り戻すためには、先述したような文献読解の価値転換と並んでとりわけ哲学を志す大学院生・学部生には、フィールドワークを導入することを提案したい。私の研究室では、憑依存在としての自分に対する負い目から、大学院生にはできるだけテキストに対応するフィールドワーク学習を推奨している。ここ

というフィールドとは、テキスト理解と有機的な関係を持つような実践の分野であり、テキスト理解と現実の理解が相互参照的に深まっていくようないわば遊技の空間である。「(青年たち)はトピカのトポスを豊富にし、そしてその間に賢慮と雄弁のための共通感覚を増大させ、想像力とか記憶力を鍛えて、これらの知性の能力によって支えられている諸技芸のために準備すべき」だとヴィーコはいう。読解した文献が適応可能となる遊戯空間において読解内容は異なつた視点からいわば立体化される。次いで、そこで涵養された事柄について正當に判断し、議論・論述できる「諸技芸」、つまりクリティカを習得すべきなのである。このトピカとクリティカは、学習の進行とともにつねに反復されるべき事柄であると考えられる。

私は負い目に駆られて、博士・修士課程の学生のうち、フーコーやアレントを専攻した学生には強制収容所やハンセン病療養所の見学や調査を、アドルノの美学理論を専攻した学生には現代芸術の批評活動を、カントとアドルノを専攻した学生にはデザインの実践領域を、メルロ＝ポンティを専攻した学生には芸術実践や荒川修作の建築空間の経験をというように、文献読解学習の背景となりうる実践活動を、本人の切実な問題関心領域として対応させるといったことを行ってきた。教員もまた、そうした実践を学生と共有し、その実践空間(トポス)を文字通り共に歩きまわること、そこで問題意識を共有し、何かを語ることの意味を共に育むことができるし、そこで自らの知識の意味を刷新し、テキストの読みに新しい光を当てることができる。古賀研究室の場合、そうした批評的実践が独自の活動として花開いたものとして、「NPO法人ドネルモ」の設立と運営がある。

結局のところ、学びとは、自分が住み込むところから遠いところへと自己を無限に疎外していくことによつてではなく、自分の位置づく場所(トポス)それ自体を耕し、豊富化するメディア＝言語を獲得していくことにある。その言語獲得の素材として既存のテキストを位置づけ直す。見方が変われば存在が変わる、そうした驚きと発見をつうじて憑依状態から自己の魂を取り戻していくこと、そうした活動のなかでのみ知は意味を持つこと、そうした理念はまさに、学生とともに生活する博士課程の哲学研究者教育においてこそ活かされるべきなのだといえよう。

註

- (1) 深尾葉子『魂の脱植民地化とは何か』（青灯社、二〇一二年）を参照。
- (2) ヴィーコ『学問の方法』（上村・佐々木訳、岩波文庫、一九八七年）、二六一―二九頁。
- (3) 同、三〇頁。
- (4) 同、二六頁。
- (5) 同、三五―三六頁。
- (6) 同、二九頁。
- (7) ヴィーコ『イタリア人の太古の知恵』（上村忠男訳、法政大学出版社、一九八八年）二二九頁。
- (8) 『分析論後書』加藤信朗訳、アリストテレス全集第一巻、岩波書店、一九七一年、第二巻第三章 90a30.
- (9) 『イタリア人の太古の知恵』、二二〇頁。
- (10) 『分析論後書』、第一巻第一章 71a.
- (11) 『学問の方法』七〇頁。ヴィーコは *ingenium* の概念を「ばらばらに分離しているものを速やかに、適宜に、そして上首尾に一つに結合する知性の能力」と定義する。これがアリストテレスのいう中名辞の探求としての学を継承するものであることは明白であらう。
- (12) 『学問の方法』、三六頁。
- (13) 同、三五頁。
- (14) 同。

（九州大学芸術工学研究院・准教授）